

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 11 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520681

研究課題名(和文)非顕在的な要素に関する第二言語習得研究

研究課題名(英文)Second Language Acquisition Research on Null Elements

研究代表者

山田 一美 (Yamada, Kazumi)

関西学院大学・理工学部・准教授

研究者番号：90435305

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本語の非顕在的な項を、Oku (1998), Saito (2007)等に従って項削除であると仮定し、以下8つの調査を通してL2学習者の空項の解釈を検証した：スペイン語、ドイツ語、非pro脱落言語の母語話者による日本語習得、日本語、ドイツ語の母語話者による英語習得、英語、日本語の母語話者によるドイツ語習得、日本語母語話者によるスペイン語習得。その結果、L1の影響が初級に留まらず上級でもみられることがあることが明らかになった。項削除の解釈は主にFeature Transfer Feature Learning (Ishino, 2010)のL2習得モデルで説明が可能であると結論づけた。

研究成果の概要(英文)：This is a study, following Oku (1997) and Saito (2007) among others, where we hypothesized that null arguments in Japanese are Argument Ellipsis (AE) and explored interpretation of null arguments in L2 grammar. In our examination, we conducted eight separate types of cross-linguistic studies: acquisition of Japanese by speakers of Spanish, German, and non-pro-drop languages, acquisition of English by speakers of Japanese and German, acquisition of German by speakers of Japanese and English, and acquisition of Spanish by Japanese speakers. The results of each study showed both positive and negative L1 influences. In addition, the influence of L1 was not limited to an early stage of L2 development but was also observed at a later stage (Wakabayashi, 1997). We concluded that interpretation of null arguments in the L2 acquisition process can be explained in the L2 acquisition model proposed by Miyamoto (2012), which is based on Ishino's (2010) Feature Transfer and Feature Learning (FTFL).

研究分野：第二言語習得

キーワード：項削除 sloppy読み strict読み 日本語学習者 スペイン語学習者 英語学習者 ドイツ語学習者
母語の影響

1. 研究開始当初の背景

本研究代表者は平成 17 年に英国エセックス大学大学院に提出した博士論文において、日本語の非顕在的な要素を代名詞 (*pro*) ととらえ、英語を母語とする学習者が抱える *pro* 習得の問題を分散形態論 (Distributed Morphology) の枠組みで分析した。また、Wakabayashi (2002), Kizu (2011) 等においても日本語の非顕在的な要素は代名詞であるという仮定のもとに、前者ではミニマリスト前期、後者では統語とディスコースのインターフェイス (Sorace 2007, 2011) での説明を利用するなど、数々の分析が提唱されてきた。

しかし、Oku (1998)以降、*pro* であると考えられてきた要素は代名詞一般とは異なる性質を持つことが明らかになった。たとえば 1) において、埋め込み節の主語は非顕在的な要素が占めているが、もしこの要素が代名詞であるならば、2b) の解釈は予測できない。

1) 山田先生は、[自分の学生が優勝する]と
思っている。田中先生も[e 優勝する]と
思っている。

2) a. 田中先生は山田先生の学生が優勝する
と
思っている。
b. 田中先生は自分の学生が優勝する
と
思っている。

これは、代名詞が sloppy な読みを許容しないという性質に起因する。よって、(2b) の解釈を(1)の 2 文目が許容するという事実は、*e* が *pro* でないことを示している。Oku は、*e* の位置に論理形式 (LF) において「自分の学生」が挿入されると主張している。

この理論的発展がもたらした知見は、第二言語における非顕在的な要素の習得に関する先行研究の分析が、広義の非顕在的な要素に関する習得の一部のパターンに限定されているに過ぎないことを示している。言語習得理論の健全な発展のためには、可能な限り広範囲の経験的事実に裏打ちされた理論的展望が必要であり、これは、明らかに改善すべき状況であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、Saito (2007) における項削除の分析 (一致素性のない言語は項削除を許容し、一致素性のある言語は項削除を許容しない) を仮定し、第二言語における非顕在的な要素の習得過程に関する経験的事実を整理、分析し、その理論的含意を明らかにすることで言語習得理論、ならびに言語理論の深化に寄与することにある。この目的を達成するために、以下、4 点を具体目標として設定する。

(1) 非顕在的な要素の習得に関する経験的事実を整理し、一般化を提示する。

(2) 新たな経験的事実を、実験結果をもとに提示する。

(3) 非顕在的な要素の習得に関する (統語的な) メカニズムを明らかにする。

(4) 非顕在的な要素の習得過程から得られる理論的含意を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、以下 2 つの言語理論と 1 つの L2 習得理論を採用し、第二言語 (L2) における空項の解釈について調査を実施した。

言語理論 1 : 項削除

日本語の空要素は *pro* ではなく項削除であり、その結果、sloppy 読みが許容される (Saito, 2007)。

言語理論 2 : 空主語パラメータ

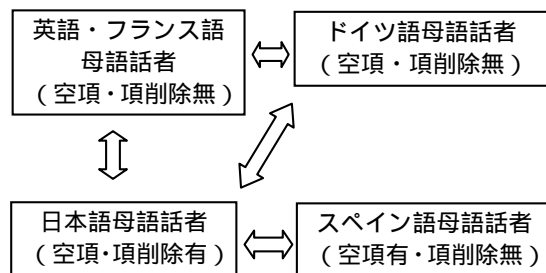
T が D 素性を伴っていれば空主語が許容される (Roberts 2007)。

第二言語習得理論 : The Feature Transfer Feature Learning (FTFL)

L1 素性は習得の初期段階で転移し、習得の進んだ上級レベルで L2 素性との競合が生じる。L1 素性と L2 素性の指定の有標性により、L2 素性が習得できるかどうかが決定する (Ishino, 2012)。

(1) 対象とする L2 習得過程 : 被験者の母語と目標言語

本研究では、日本語の空項を、Oku (1998), Saito (2007) 等に従って項削除であると仮定し、L2 学習者の空項の解釈を検証するため、以下、8 タイプの異言語間習得調査を実施した : スペイン語、ドイツ語、非 *pro* 脱落言語の母語話者による日本語習得、日本語、ドイツ語の母語話者による英語習得、英語、日本語の母語話者によるドイツ語習得、日本語母語話者によるスペイン語習得。



上記の計 8 タイプの第二言語習得過程を比較、検討することにより、*pro* ならびに項削除が習得過程において、いかに関与しているのかをより明確にすることができる。

(2) 被験者

本調査で収集した計 8 種類の L2 習得データは表 1 ~ 5 の通りである。各調査は、日本語母語話者を除き、被験者の通う大学 (院) や

語学学校のある海外で実施された。

表 1：日本語学習者 (JFL)

母語	年齢	レベル*
非 <i>pro</i> 脱落言語* (n=15)	19-35 (平均=21.9)	上級(7) 中上級(8)
ドイツ語 (n=17)	18-36 (平均=23.8)	上級(2) 中級(5) 初級(10)
スペイン語 (n=28)	18-44 (平均=25.5)	中上級(6) 中級(11) 初級(11)

*英語 (n=8); フランス語 (n=2); オランダ語 (n=1);
ドイツ語 (n=1)

**レベル JLPT N1=上級, N2/N3=中級, N4/N5=初級

表 2：英語学習者 (EFL)

母語	年齢	レベル*
日本語 (n=33)	18-32 (平均=20.5)	上級(6) 中級上(7) 中級下(16) 初級(4)
ドイツ語 (n=25)	18-35 (平均=25.2)	上級(12) 中級上(2) 中級下(9) 初級(2)

*Oxford Placement Test (OPT)を使用

表 3：ドイツ語学習者 (GFL)

母語	年齢	レベル*
日本語 (n=26)	19-29 (平均=21.1)	上級(4) 中級(20)
英語 (n=13*)	17-70 (平均=22.8)	中級下(6) 初級(7)

*DDJ/DSH ***19 名中 6 名のデータが分析対象外で排除

表 4：スペイン語学習者 (SFL)

母語	年齢	レベル*
日本語 (n=23)	19-23 (平均=20.9)	中上級 (9) 中級(12) 初級(2)

*所属クラス情報による、中上級は DELE の B2 レベル

表 5：統制群

母語	人数
日本語	11
英語	8
スペイン語	16

また、追実験として、実験アイテムに修正を加え、新たに L1 英語の上級日本語学習者 (23 名)、および、L1 日本語の初中級英語学習者 (30 名) から、双方向の習得データを収集し、現在、分析中である。

(3) 調査方法

本調査では、2 種類のタスク (真偽値判断タスク、スクリーングタスク) を使用し、L2 学習者の空項の解釈を検証した。

真偽値判断タスク

学習者が空項に sloppy 読みと strict 読みを容認するかを検証するためのタスクである。28 の文タイプ、52 の刺激文を作成し (かき混ぜ文、文主語が単数・複数、否定文等も含む)、うち、sloppy 読み・strict 読みに関する文タイプは以下の 4 つである。

表 6：文タイプ

空項	文脈	
空主語	sloppy 読み	(n=2)
空主語	strict 読み	(n=2)
空目的語	sloppy 読み	(n=2)
空目的語	strict 読み	(n=2)

実験手順は、まず、動物のフィギュア同士、あるいは人形同士で会話をしている写真や動画をスクリーンに映し出し、同時に会話内容も被験者に聞かせる (確実な文脈理解のため、会話は各学習者の母語で録音)。続いて、目標言語の学習者という設定のキャラクター (= Elmo) が、その会話の内容を、目標言語で説明する。被験者は、その説明文 (= 刺激文) が正しく会話内容 (状況) をとらえているかを判断する。以下 a、b は実験タスクの例である。

a. Sloppy 解釈



僕の車きたないなあ。きれいにしようっと。



ああ、きれいになった。



私もきれいにしないと。



きれいになったわ。

刺激文

Elmo: くまは 自分の車をふいた。
ペンギンも (車を) ふいた。

b. Strict 解釈



くま：
車をきれいにし
ようっと。

ペンギン：
手伝うわ。



くま：
さあ、きれいにな
った。ペンギン
さん、どうもあり
がとう。

ペンギン：
どういたしまし
て。

刺激文

Elmo: くまは 自分の車をふいた。
ペンギンもふいた。

スクリーニングタスク

真偽値判断タスクでの分析対象が、L2 で空項を許容する被験者となるため、条件に合う被験者を選び分ける目的で実施した。本タスクは、少なくとも、空主語を含む文、空目的語を含む文の、それぞれ3文ずつ、計6文から構成され、学習者にはそれぞれの目標言語で提示した。各文を読み、容認可能（自然）あるいは、容認不可能（不自然）かを判断するタスクである。

空主語文

たろうが赤い服を着ている女のの人を見た時、(たろうは)その人をサムのお姉さんだと思いました。

空目的語文

たろうがコンピューターを壊してしまいました。お父さんが(コンピューターを)なおしました。

被験者が空主語文を1つ以上、且つ、空目的語文を1つ以上正しいと判断すれば、それは学習者のL2で空項が許容されている証拠であり、真偽値判断タスクの分析対象とした。しかし、空主語、空目的語文をすべて誤りと判断した学習者、または、空主語文あるいは空目的語文のどちらか一方のみを正しいと判断した学習者は、分析対象としなかった。

4. 研究成果

以下、各L2習得過程および被験者別に、結果を報告する。

(1) L2 日本語習得

非 pro 脱落言語話者

上級レベルであっても、主語・目的語の両位置で空項に sloppy 読みを容認しなかった(容認率 21.5~31.3%)。一方、strict 読みは高い割合で容認した(容認率 62.5~87.5%)。こ

れは、彼らが L1 英語の一致素性を忘れることができないことに起因すると考えられ(L1の影響)、FTFLに矛盾のない結果となった。

表7: 非 pro 脱落言語話者 JFL (主語位置)

	空主語 (sloppy)	空主語 (strict)
上級 (n=3)	21.5	85.7
中級 (n=22)	25	87.5

表8: 非 pro 脱落言語話者 JFL (目的語位置)

	空目的語 (sloppy)	空目的語 (strict)
上級 (n=3)	28.6	78.6
中級 (n=22)	31.3	62.5

ドイツ語母語話者

全レベルの学習者が主語・目的語両位置で sloppy 読みと strict 読みを容認した(容認率 60~100%)。これは、被験者がドイツ語の一致素性を忘れたからではなく、口語ドイツ語では、文脈から意味が明らかな場合は空項が許容されるため、strict 読みはL1転移であると考えられる。さらに最近の研究(Trutkowski, 2016)では、ドイツ語でもある条件下では sloppy 読みが許容されることが報告されており、本研究の刺激文はその条件を満たすものであるため、sloppy 読みが容認されたのもL1の影響であると考えられる。

表9: ドイツ語母語話者 JFL (空主語)

	空主語 (sloppy)	空主語 (strict)
上級 (n=2)	100	100
中級 (n=5)	70	80
初級 (n=10)	80	90

表10: ドイツ語母語話者 JFL (空目的語)

	空目的語 (sloppy)	空目的語 (strict)
上級 (n=2)	100	100
中級 (n=5)	60	100
初級 (n=10)	70	80

スペイン語母語話者

全てのレベルの被験者が主語・目的語両位置で sloppy 読みと strict 読みを容認した(63.6~86.4%)。スペイン語には一致素性があるため、sloppy 読みは許容されないと考えられるが、最近の研究(Duguine, 2013)では、sloppy 読みが許容されることが報告されている。スペイン語での sloppy 読みの許容は、phi 素性一致が clitic の phi 素性と関係しており、Tの解釈不可能な phi 素性が clitic の phi 素性と Agree 関係となり value される。結果、名詞的な項と v あるいは T の間で phi 素性の一致は要求されず、スペイン語でも項削除が許容される。一方、スペイン語母語話者のL2日本語における sloppy 読みの許容は、日本語の格助詞が clitic 同様、phi 素性を有し、Tの解釈不能な phi 素性と Agree 関係を結んでいると考えられる。これは FTFL と矛盾しない結果となった。

表 11: スペイン語母語話者 JFL (空主語)

	空主語 (sloppy)	空主語 (strict)
上級下 (n=6)	75.0	75.0
中級 (n=11)	63.6	81.8
初級 (n=11)	86.4	86.4

表 12: スペイン語母語話者 JFL (空目的語)

	空目的語 (sloppy)	空目的語 (strict)
上級下 (n=6)	66.7	66.7
中級 (n=11)	77.3	77.3
初級 (n=11)	81.8	72.7

(2) L2 英語習得

日本語母語話者

主語・目的語の両位置において sloppy、strict 読みの容認率に統計的な有意差は見られなかった(主語位置 $t(26)=.00$, $p=1.00$ 、目的語位置 ($F(2, 52)=1.62$, $p=.21$: 数量的読み含)。中級レベルの段階ではまだ L1 の影響が見られ、一致素性の習得が生じていない。よって FTFL と矛盾しない結果となった。

表 13: 日本語母語話者 EFL (空主語)

	空主語 (sloppy)	空主語 (strict)
中級上 (n=7)	57.1	78.6
中級下 (n=16)	78.1	75.0
初級 (n=4)	100	75.0

表 14: 日本語母語話者 EFL (空目的語)

	空目的語 (sloppy)	空目的語 (strict)
中級上 (n=7)	92.9	92.9
中級下 (n=16)	84.4	78.1
初級 (n=4)	100	100

ドイツ語母語話者

スクリーニングタスクにおいて、ほぼすべての学習者が空項を含む文を許容しなかったため、真偽値判断タスクの分析対象とはならないが、真偽値判断タスクの結果を紹介する。

表 15: ドイツ語母語話者 EFL (空主語)

	空主語 (sloppy)	空主語 (strict)
上級 (n=12)	8.3	45.8
中級 (n=11)	22.7	50
初級 (n=2)	50	50

表 16: ドイツ語母語話者 EFL (空目的語)

	空目的語 (sloppy)	空目的語 (strict)
上級 (n=12)	70.8	91.7
中級 (n=11)	68.2	86.4
初級 (n=2)	75	75

(3) L2 ドイツ語習得

英語母語話者

の日本語母語話者の L2 ドイツ語習得データと同様の結果となり、空主語については、特に、中級学習者は sloppy 読みを容認していない。のとおり、もし日本語母語話者の L3 ドイツ語が L2 英語をもとに成立しているとすれば、とのデータの類似性が容易に説明される。

表 17: 英語母語話者 GFL (空主語)

	空主語 (sloppy)	空主語 (strict)
中級 (n=6)	0	37.5
初級 (n=7)	35.7	64.3

表 18: 英語母語話者 GFL (空目的語)

	空目的語 (sloppy)	空目的語 (strict)
中級 (n=6)	43.8	68.8
初級 (n=7)	78.6	85.7

日本語母語話者

上級学習者は主語・目的語両位置で sloppy 読みを容認せず、strict 読みのみ容認した。ここで、被験者は英語を学習した後、ドイツ語を学習しており、つまり、英語が L2、ドイツ語が L3 ということが重要である。ドイツ語では指示的な *pro* が許容されず、また、T の ν 素性が νP を T の指定部に移動させることをふまえると、被験者の L3 ドイツ語文法の空項 (= 空主語・空目的語) はドイツ語からのものではない。可能性として、被験者の L2 英語をもとにした L3 ドイツ語の T に D 素性を加えることにより、*pro* が許容されたと考えられ、よって、strict 読みのみが容認される結果となった。

表 19: 日本語母語話者 GFL (空主語)

	空主語 (sloppy)	空主語 (strict)
上級 (n=3)	0	83.3
中級 (n=22)	68.2	75

表 20: 日本語母語話者 GFL (空目的語)

	空目的語 (sloppy)	空目的語 (strict)
上級 (n=3)	16.7	83.3
中級 (n=22)	77.3	63.6

(4) L2 スペイン語習得

日本語母語話者

主語位置において、中上級レベルの学習者は sloppy 読みを容認しなかったが、初中級レベルの学習者は容認した。一方、目的語位置においては両グループともに sloppy 読みを容認した。重要なことは、被験者は英語を学習したのちスペイン語を学習しており、英語が L2、スペイン語が L3 ということである。よって、被験者の L3 スペイン語は L2 英語にもとづいており、おそらく L2 英語の影響があるといえるだろう。L2(L3) 習得が形態的な手がかりをもとに引き起こされる (Zobl and Licerias 1994; Meisel 1997 など) と仮定すると、主語と動詞の一致という、T における phi 素性の明らかな形態的な手がかりがあるため、被験者の英語の T には phi 素性が存在しているに違いない。一方で、目的語の一致についてはなんの手がかりも得られない。このことから、被験者の L3 スペイン語の T には phi 素性が存在するが ν には存在しない可能性がある。つまり、空主語は *pro* であり、空目的語は項削除なのである。また、なぜ被験者の L3 スペイン語で空項 (*pro*) が許容されるのかは、D 素性が L2 英語の T の素性の束に

加えられているからであると考えられる。以上のことから、FTFL と矛盾しない結果となった。

表 21：日本語母語話者 SFL (空主語)

	空主語 (sloppy)	空主語 (strict)
中上級 (n=9)	22.2	94.4
初中級 (n=14)	87.5	75

表 22：日本語の母語話者 SFL (空目的語)

	空目的語 (sloppy)	空目的語 (strict)
中上級 (n=9)	94.4	38.9
初中級 (n=14)	75	75

上記 8 種類の sloppy 読み、strict 読みに関する L2 習得過程の検証結果は、FTFL (Ishino, 2012) の枠組みで示された L2 習得過程と一致する。FTFL における L1 の phi 素性転移及び L2 の phi 素性習得の観点から、本調査結果を被験者ごとに、表 23 にまとめる。

表 23：FTFL における phi 素性の転移と習得

被験者	初期段階	上級レベル
L1 非 pro 脱落 言語 L2 日本語	phi 素性 (転移)	
L1 英語 L2 ドイツ語	phi 素性 (転移)	
L1 ドイツ語 L2 英語	phi 素性 (転移)	
L1 ドイツ語 L2 日本語	phi 素性 (転移)	
L1 スペイン語 L2 日本語	phi 素性 (転移)	
L1 日本語 L2 英語	転移なし	L2 phi 素性 (習得)
L1 日本語 L2 ドイツ語	転移なし	L2 phi 素性 (習得)
L1 日本語 L2 スペイン語	転移なし	L2 phi 素性 (習得)

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 6 件)

Yamada, K. and Miyamoto, Y. (2016). On Interpretation of Null Arguments in L2 Japanese by European non-pro-drop and pro-drop language speakers. JSL2016 Handbook. The Japanese Society for Language Science (言語学会). pp126-129. (口頭発表要旨の査読有り)

Yamada, K. (2016) Interpretation of Argument Ellipsis by Japanese and German EFL learners. 関西学院大学言語教育研究センター「言語と文化」19 巻, pp.47-61. (査読無し)

Yamada, K. (2015) Interpretation of Argument Ellipsis by European Non-pro-drop and Topic-drop Language Speakers. 関西学院大学言語教育研究センター「言語と文化」18 巻, pp.29-42. (査読無し)

Miyamoto, Y. and Yamada, K. (2015). ON

NULL ARGUMENTS AND PHI -FEATURES IN SLA: A PRELIMINARY STUDY. Nanzan Linguistics 10, pp.1-20. (査読無し)

Yamada, K. (2014). Acquisition of Null Elements in SLA: A Comparative Study of Japanese EFL Learners and Spanish JFL Learners. 関西学院大学言語教育研究センター「言語と文化」17 巻, pp17-28. (査読無し)

Yamada, K. (2013). The Interpretation of Argument Ellipsis by Japanese Child and Adult Speakers. Kwansei Gakuin University Humanities Review 17, pp159-169. (査読無し)

[学会発表] (計 4 件)

Miyamoto, Y. and Yamada, K. (2017.9.4-7). On a Mixed Nature of L3 Spanish Grammar of L1 Japanese Subjects with L2 English (accepted). International Symposium on Monolingual and Bilingual Speech (ISMBS). ハニア (ギリシャ)

Yamada, K. and Yoichi, M. (2016.8.24-27). On Interpretation of Null Arguments in L2 Japanese by European non-pro-drop and pro-drop language speakers. The European Second Language Association (EuroSLA)26. ユバスキュラ (フィンランド)

Yamada, K. and Miyamoto, Y. (2016.6.4-5). L2 Interpretation of Null Arguments by Japanese SFL learners and Spanish JFL learners. The Japanese Society for Language Sciences 18th Annual International Conference (JLS2016) (言語学会) 東京大学 (東京都・文京区)

Miyamoto, Y., Yatsushiro, K. and Yamada, K. (2015.11.6). On Null arguments and L1/L2 Transfer: A Study of Japanese Learners of German as a Foreign Language. LASLAB Workshop on Language Acquisition and the Second Language Classroom. バスク (スペイン)

[その他]

言語学会にて JCHAT 賞 (優秀論文賞) 受賞 (2016 年大会)

6. 研究組織

- (1) 研究代表者: 山田 一美 (YAMADA KAZUMI) 関西学院大学・理工学部・准教授
研究者番号: 90435305
- (2) 研究分担者: 宮本 陽一 (MIYAMOTO YOICHI) 大阪大学言語文化研究科・教授
研究者番号: 50301271
- (3) 研究協力者: 八代 和子 (KAZUKO YATSUSHIRO) The Leibniz-Zentrum Allgemeine Sprachwissenschaft (ZAS)・Research fellow